パーシャルデンチャーとコンプリートデンチャーの咬合関係をどう求めるか

東京都歯科技工士会　岩城謙二

一般に咬合様式を咬合平面で捉えているのではないだろうか。パーシャルデンチャーにおいて、側方咬合圧の多くはクラスプアームとくにブレーシングアームによって歯に伝達され、床が粘膜負担の場合には、歯にかかる側方咬合圧を減少させるような維持装置にする方がよい。それゆえ、維持装置を選択する際には、天然歯の咬頭の高さ、数、位置を考えて、側方咬合圧がそれを支持する組織に向かうように維持装置を配置しなければならない。そのためには、歯科技工士もＸ線画像診断の情報を必要とし、咬合接触にもその違いが明確に再現できるようになることまでも求められる。ゆえに、患者の装着感を向上させることができる。咬合面の傾斜角から咬合関係を確立しても不安定な義歯では噛めないのである。また、最近の咬合関係における傾向として、垂直的顎位に比べ水平的顎位を重要視している報告が数多くされていることの気付かれているのではないだろうか。とくに、パーシャルデンチャーの咬合関係において、天然歯の咬合を調整して安定させれば、咬合は設計上大きな問題とはならない。しかし、パーシャルデンチャーの臼歯部を天然歯と同じ大きさにすべきか、あるいはそれよりも小さくすべきかという問題について考えてみる必要がある。

そこで今回は、義歯の咬合関係の中でもパーシャルデンチャーとコンプリートデンチャーの側方咬合圧の違いについて、臨床例を用いて解説し、Ｘ線画像診断結果から咬合関係をどのように構築するかという考え方を紹介する。

また、歯科技工所における消毒の考え方は、「持ち込まない」「持ち出さない」のが感染予防対策である。その実践例について併せて紹介する。